

## 聖霊降臨後第 12 主日 ミサ固有唱解説

この解説は **Una Voce France** のホームページの記事の翻訳です。原文（フランス語）のテキストは下記の URL をご覧下さい。

<http://www.unavoce.fr/content/view/1256/26/>

録音の中の固有唱は 1958 年版ドン・ガジャール指揮のソレム修道院聖歌隊の演奏によるものです。

録音後半（25 分代以降）には聖母の被昇天を祝って、聖母の祝日に歌われる 10 番のキリアーレが入っています。（解説によれば、より有名な 9 番のキリアーレはより古い 10 番を再編成したものだそうです。）演奏はアルジャンタンのベネディクト会女子修道院聖歌隊によるものです。また 8 月 20 日は聖ベルナルドの祝日であることから、イタリアのキャラバレのシトー会修道院聖歌隊による聖ベルナルドの祝日のアレルヤ唱、同聖歌隊による聖ベルナルドの聖母への祈りを歌詞にしたアンティフォナ "**Memorare**"、さらに 8 月 22 日の聖母マリアの汚れなき聖心の祝日に因んで、ティマドウクのトラピスト修道院聖歌隊によるこの祝日のアレルヤ唱（録音は 1940 年）、再びアルジャンタンのベネディクト会女子修道院聖歌隊による被昇天の祝日に先立つ晩課の "**Magnificat**"、最後にシトーのシトー会修道院聖歌隊による "**Salve Regina**" を聞くことができます。

### 原文冒頭の絵の解説

アントネッラ・カプッチョ(1946 年~)作、油彩画

2008 年の教皇様の最初のアメリカ訪問に先駆けて注文されたこの絵は、ベネディクト 16 世の最初の回勅、"**Deus Caritas Est**"（神は愛である）と、新約聖書の「善きサマリア人」の譬え話（ルカ、10 章 25~37 節）について考えてみることを促しています。

ベネディクト 16 世教皇様は、教皇様の装束で立っておられます。滑らかなカーテン地と、起伏のあるイタリアの風景が絵の背景になっています。教皇様の右側には開いた本があり、そこにはこの最初の回勅のメッセージを伝えるラテン語が書かれています。この回勅は、司教、司祭、助祭、修道士、修道女、およびキリスト教の愛に忠実なすべての一般信徒に向けられたものです。

この回勅はおよそ 16000 語から成っています。前半はベネディクト 16 世の母国語であるドイツ語で書かれており、後半は前任者のヨハネ・パウロ 2 世教皇

様の未完の著作に着想を得たものです。この回勅は 2005 年 12 月 25 日にベネディクト 16 世が署名され、2006 年 1 月 25 日に公布され、正式にその他の 7 つの言語に翻訳されました。

教皇様が手を載せておられる書見台の開いた本の左側には、新約聖書の「善きサマリア人」の譬え話（ルカ、10 章 25～37 節）を題材にした細密な挿絵が描かれています。この譬え話によってイエズス様は、苦境にある全ての人に同情を示し、救いの手を差し延べなければならないということを示されました。この聖書の箇所は聖霊降臨後第 12 主日の福音書朗読の箇所に当たります。

教皇様の手の先には小さな天使の姿があり、天使は延ばした手に持ったオイルランプから発する世の光をかざしています。教皇様が私たちにキリストの愛を感じるようにと勧めておられる回勅の重要な箇所で、愛は闇の世界を照らし、私たちに生き、行動する力を与える光 - 実際には唯一の光 - であると言われていています。画家が A. Capuccio という自分の署名を入れたのはこのランプの台座の部分です。

### *Domínica Duodécima post Pentecóstem*

#### 聖霊降臨後第 12 主日、2012 年 8 月 19 日、緑、2 級

本日の聖霊降臨後第 12 主日のミサの別名（善きサマリア人のミサ）は善きサマリア人の福音書に由来しています。

入祭唱は詩編 69 の「神よ私を助けに来て下さい。主よ、急いで私を助けに来て下さい。」という美しい章句から始まります。カシアヌスは第 10 講話の中で、この魂の叫びがいかにも、どんな状態に在る時にも適切で、どんな気分にも応えるものであるかを示しています。またマンドの司教デュランはこの章句をヨブが置かれた状況にあてはめています。なぜならヨブの数々の試練を物語るヨブ記から取られた夜の聖務日課の朗読が時に、とても稀ではあれ、この主日と重なることがあるからです。またルペルトは好んでこの章句の中に、先週の福音書朗読で、その神秘的な治癒が私たちの黙想の題材となった、耳が聞こえず口のきけない人の声の響きを見ています。ルペルトは言います。「我々、人類の最初の先祖は創造主の教えを聞く耳を持たず、創造主を賞め歌うべき口がきけなくなりました。主によって舌を解かれたとき、まず最初にすべきことは神

に祈ることだ。」と。また、この章句は日中と夜の各時課の聖務日課の最初の言葉として、教会の毎朝の最初の一声でもあります。

ドン・ゲランジェ著、「典礼の一年」より

- [Introibo](#) の HP では、ドン・ゲランジェ、ドン・バロン、ドン・シュテールの興味深い註解を閲覧できます。

- 固有唱の楽譜がない方は、[Sancta Missa](#) の HP で楽譜を閲覧できます。

- Una Voce France の URL、<http://www.unavoce.fr/content/view/1256/26/> の音声の部分をクリックすると、当該の主日の前の月曜日以降、放送の録音が聴けます。

#### 入祭唱：Deus in adiutorium

入祭唱では詩編 69 が使われています。この詩編は、この世の危険と試練の只中にあるの、主に向かっの懇願です。最初の章句はとても有名です。なぜなら例外なしに、すべての時課の聖務日課の最初に歌われるからです。神への信頼に満ちた呼びかけで、神は私たちにお恵みを下さる用意ができておられますが、私たちがそのお恵みを乞い願うことを望んでおられます。

*Deus, in adiutorium meum intende : Dómine, ad adjuvándum me festína :  
confundántur et revereántur inimíci mei, qui quærunt ánimam meam.*

神よ、私を救いに来て下さい。主よ、急いで私を助けに来て下さい。私を亡き者にしようとする者たちを挫き、恥じ入らせてください。

入祭唱の歌詞では、詩編のこの最初の章句に 2 つめの章句が続きます。

*Avertántur retrórsu(m) et erubéscant : qui volunt mihi mala..*

私に害をなそうとする者たちを、恥じ入り退かせて下さい。

この入祭唱のメロディはかなり独特です。最初はまず確信に満ちた高音による主張から始まります。歌詞が大いに懇願をこめたものであるのに対し、旋律は絶対的な信頼を表現しています。やがて旋律は常に同じ音階の周りを巡り、より穏やかで静的になり、大変和やかな低音の終止音で完結します。

### 昇階唱：*Benedícam Dóminum*

入祭唱と同じく、聖霊降臨後第12主日の昇階唱の歌詞も詩編の冒頭の章句です。ここでは詩編33が使われています。大きな危険から解放された感謝と賛美の詩編で、典礼ではよく使われるものです。最近では聖霊降臨後第7主日の昇階唱や第8主日の拝領唱にも使われていましたし、今後、第14主日の奉獻唱にも用いられます。この詩編の最初の2つの章句は全面的に賛美を表現しています。

*Benedícam Dóminum in omni témpore : semper laus eius in ore meo.*

*In Dómino laudábitur ánima méa: áudiant mansuétí, et laeténtur.*

私はいつの時も主を誉め称えよう。常に主への賛美を口にしよう。私の魂は主を誇りとする。柔和な者はそれを聞き喜べ。

"*Semper laus eius in ore meo* (常に主への賛美を口にしよう)"という箇所は全ての歌い手、わけてもグレゴリオ聖歌の歌い手の座右の銘ともいうべきものですが、主が私たちに下さる恩恵を享受するように誘われているのは「柔和な者」、すなわち心に傲慢や暴力的な思いを決して抱かない者のみです。

そのためこの曲の旋律は、長いヴォカリーズのある他の昇階唱の旋律同様、長いヴォカリーズ（母音唱法）によって大きく展開していくものの、全体的にはかなり抑制の利いた穏やかなものとなっています。ただ、"*in omni tempore* (いつの時も)"の高音への美しい上昇と、前半の終わりの"*meo* (私の(口))"の部分の熱意のこもったクレッシェンドの箇所を除いては。後半は多くの昇階唱とは異なり、前半にも増して穏やかで抑制が利いています。ここでは"*mansueti*

(柔和な者) "の語の部分での、同じ音階を行き来する、観想的な長いヴォカリーズによって、内なる喜びが表現されています。

### アレルヤ唱 : *Dómine, Deus salútis meæ*

聖霊降臨後第9主日のアレルヤ唱と同様、第12主日のアレルヤ唱は、この時期の典礼の一連のアレルヤ唱としては例外的です。というのも普通、この時期のアレルヤ唱は熱意のこもる勝利の叫びを表現しているからです。本日のアレルヤ唱では再び懇願を表す歌詞に出会います。また、このミサの入祭唱や昇階唱、ひいてはこの時期の大部分のアレルヤ唱と同様に、このアレルヤ唱の歌詞も詩編の冒頭を用いており、今回は詩編87です。この詩編は全ての人から見棄てられた不幸な人の祈りで、詩編全体の中でも異色なのは、いかなる信頼や希望の言葉もない長い嘆きに過ぎないという点です。この詩編は聖週間に歌われ、その際は明らかに苦しむキリストの言葉として歌われますが、ここでは最初の章句しか見当たりません。

### *Dómine, Deus salútis meæ, in die clamávi et nocte coram te*

主よ、我が救いの神よ、昼も夜も私は御前で叫んで参りました。

この歌詞を聖書の文脈から切り離し、私たちの絶えざる、けれども信頼を込めた祈りの肯定として解釈することも可能でしょう。この旋律が私たちをそのように誘っています。

この旋律は柔らかく、緩やかに移行する音程を伴う、ゆったりとしたメロディラインによって、神秘的な熱意と共に穏やかで平和な自己放棄にも満ちています。この旋律は一音も違えず、「善き羊飼いの主日」すなわち御復活後第2主日のアレルヤ唱、「*Cognoverunt*」と同じものです。その歌詞は「彼らはパンが割かれた時、主イエズスを認めた。」というものでした。そこでは主を親しく知るといふ恵みをくださった主への感謝が表されていました。今回のミサでは、昼も夜も主に請い願うという形で表される同様の熱意が見出されます。

## 奉献唱 : *Precátus est*

聖霊降臨後第 12 主日の奉献唱は、たとえそれが単にその長さで劇的な濃密さによるものだとしても、例外的な性格を備えています。歌詞は詩編ではなく出エジプト記を題材にしています。

この聖霊降臨後の時期、今回と同じく旧約聖書の様々な箇所を題材にした 6 つの長い奉献唱があります。そのうちのひとつでダニエル書を題材にした奉献唱は聖霊降臨後第 7 主日に耳にしました。そしてこの先、第 17 主日、第 18 主日、第 21 主日、第 22 主日にまた耳にすることになります。しかし、今回の奉献唱が一番長く、その長さは御公現後第 2 主日の長い奉献唱 "*Jubilate*" を凌駕しています。本日の奉献唱は三面祭壇画の形式を取っていて、中央の祭壇画に当たる部分がモーセの祈りです。モーセは、主から遠ざかり金の雄牛を拝んだために主が滅ぼそうとされたイスラエルの民のために祈っています。この祈りの左右を 2 つの短い物語、つまり導入部の物語と帰結に当たる物語が縁取っています。

*Precátus est Moyses in conspéctu Dómini, Dei sui, et dixit : Quare, Dómine, irascéris in pópulo tuo ? Parce iræ ánimæ tuæ : meménto Abraham, Isaac et Iacob, quibus iurásti dare terram fluéntem lac et mel. Et placátus factus est Dóminus de malignitáte, quam dixit fácere pópulo suo..*

モーセは自分の主なる神の御前で祈った。主よ、なぜご自分の民にお怒りになるのですか？御魂の怒りをお鎮めください。乳と蜜の流れる地を与えると誓われたアブラハムとイサクとヤコブを思い起こして下さい、と。すると怒りを鎮められた主は、ご自分の民に下すと言われた災いを思いとどまられた。

導入部の物語である最初の文が 2 度繰り返されていることにお気づきになるでしょう。これは御公現後第 2 主日の奉献唱 "*Jubilate*" にも共通していますが、本日の奉献唱では同じ旋律が繰り返されています。最後の終止音がわずかに違っているだけです。この導入の物語は穏やかで、柔らかなうねりによってうまく表現されています。それに続くモーセの祈りは 3 つの文から成っています。直ちに、それまでより大きな動きと緊張が感じられます。最初の文はほとんど不安に満ちています。2 つめの文は請い願う性格のもので、最後の 3 つめの文

の" *meménto Abraham*" では唐突に、激しく高音に登り詰めます。帰結の部分では再び静穏さが戻ります。主は罰を思いとどまられ、安堵と寛ぎがそこにあります。

### 拝領唱 : *De fructu*

聖霊降臨後第 12 主日の拝領唱のアンティフォナには、先週の日曜日の拝領唱と同じ発想が見られます。すなわち収穫の時である真夏のこの時期、収穫物を主に捧げ、主がふんだんに与えて下さった大地の実りを感謝する、という発想です。本日の歌詞は詩編 103 を下敷きにしています。この詩編は全ての被造物の素晴らしさに対する感謝と賛美の大いなる賛歌で、その素晴らしさは見事な詩情によって列挙されます。本日の典礼では、秘蹟の材料であるパンと葡萄酒と油にまつわる箇所が選ばれています。

*De fructu óperum tuórum, Dómine, satiábitur terra : ut edúcas panem de terra, et vinum lætíficet cor hóminis : ut exhílalet fáciem in oleo, et panis cor hóminis confírmet.*

主よ、大地はあなたの業の実りに満ちています。かくしてあなたは大地からパンを引き出し、葡萄酒は人の心を喜ばせます。油は人の顔に喜びをもたらし、パンは人の心を力づけます。

聖体拝領に際して、この歌詞が御聖体を表しているのは明らかです。力を与えるパンと喜びをもたらす葡萄酒はとても簡潔で軽い旋律に乗って歌われます。その旋律は、必要なもの全てを与えてくれる善き父のいる幼い子供の信頼に満ちた幸福感を表しています。